

学園対魔捜査官
斎藤純乃

小説 岩重十郎太

挿絵 友屋勘九郎

立ち読み版

第一章

緒戰

006

第二章

謀略

050

第三章

調教

083

第四章

斬肉

146

第五章

挫折

191

登場人物紹介

Characters



さいとう あやの
斎藤 綾乃

対異形治安委員会・潜入捜査室学生班所属。今回、委員会からの命令で私立橙花学園に潜入。

たかさか げんいち
高坂 玄一

学園に出入りしている購買の納品業者。綾乃の過去を知る謎の男。

うみの ひろし
海野 比呂志

映像研究同好会会長。太め。積極的な性格の映像オタク。

くどう しゅんいち
工藤 俊一

映像研究同好会副会長。細身、ひ弱な感じ。

「それじゃ、悶えてもらおうかねえ？」

言い終わるよりも早く、綾乃の身体に起こったのは異変。少女の口がだらしなく開いて、声にならない気泡が漏れた。

「っ、……か、は……っ!?」

一瞬の、電撃。目を見開いて、涙が溢れる。脳が震える鋭い刺激。全身がブルブルと震えた。クシャクシャになるのも構わずにスカートの中を握る。声が聞こえた。生徒たちが行き過ぎながら談笑している。それよりも扉に間近いところで海野が開錠を促している。

(なに？ いまの……)

呆然と、思う。答えは知れていた。海野が綾乃の体内に潜む小生命体に命令して、激烈な淫楽電流を送り込んだのだ。ドッと嘔き出した汗が重力のままに伝いまくり、手近な布に吸収されていく。制服の下、ブラの中、尖り過ぎた乳頭が擦れて、チリチリとした無視し難い感覚を発している。スカートの中、床についた白下着が重たく湿気を含んで、貼りついていた。

「あ、は、……ひ、……っ」

呼吸の再開。緊張からゆっくりと解放され始めた身体が床に折り重なる感じで崩れ、綾乃のすっかり閉じられなくなってしまう口から、吐息混じりの呻き声が漏れる。全身の毛が逆立って、空気に触れるのさえ刺激が強い。

「おい、開けろって」

矢継ぎ早に淫樂に汚染された少女に発破をかける感じで、扉が蹴られる。猶予はなかった。もう一度あの快樂電流を食らうのは、避けるべきに決まっている。

「ま、待つて」

掠れた声で呼びかけながら、綾乃はやっと、スカートの裾を掴んで離さない右の手を、扉の鍵へと伸ばしていく。少し身を伸ばして、それだけでチリ、と痺れる身体を無視して、指はやっと鍵に届いた。その開錠の音とともに、痺れを切らしたとばかり扉が勢いよく開かれる。扉はまだ鍵に指のかかったままの右手を弾き、いきなり全開までスライドして、目の前、二人の変質者が壁の様に立っている。

ギクリとした。かなり高いところから見下ろす二人の顔が、一瞬驚きの表情になって、それからニタリ、変質者の顔に戻る。いま、歴戦の対魔捜査官は自分が思っている以上に、二人が期待していた以上に、酷い姿になっているのではないか？

それは実際、不甲斐なき過ぎる姿だった。クシャクシャになったミニ・プリーツスカート。ノースリーブのベストから伸びる両腕はブラウスが汗でベトベトと貼りつき、上気した肌を透けさせている。そもそもなんの気遣いもなく床に崩れ座っている姿勢が、平素の対魔捜査官の颯爽とした出で立ちとのギャップを象徴していた。

「へへ、こりゃ大分追い詰められたな」

「ま、これなら案外三日かからないかもねえ？」

(三日?)

寸断された思考が辛うじて海野の言葉尻を捉えて、直ぐに分裂する。綾乃の脇を迂回して室内に入り込んできた二人が扉と鍵を閉めて、部屋は密室状態を回復した。そのまま工藤は部屋の真ん中にまで進んでいって、機材を設置し始める。元コンピュータールームは机も椅子も撤去されていて駄々広いから、場所取りには事欠かない。工藤は手早く三脚とハンディカメラを設置してしまった。

「さて、パッチリと撮らしてもらおうぜ？ 綾乃ちゃん」

言われて、身体を内側から弄られる感覚に捌け口を求めている感情が触発される。工藤を潤んだ瞳で睨みつけた綾乃が、声を荒げた。

「じよ、冗談じゃないわ。それに、あなたがいること自体、」

「おやおや」

その苛立ちの言葉を海野が切る。おかしくてならないといった口調に、少女の視線が思わず釣られた。

「工藤に用がなくて僕にはあるってことは、どうやら覚悟決まってるらしいねえ？」

(……!)

言葉に詰まった綾乃の眼前、海野がズボンのチャックに指をかける。そこはとつくに大

大きく膨張していて、押し曲げられたチャックはなかなか主人の思ったとおりには開こうとしないほどだ。それまで鼻腔をくすぐっていた自分自身の汗の匂いの代わりに、おぞましい牡の臭気が漂ってきていた。呼吸もできない悪臭を、淫気に喘ぐ少女は吸い込むまま、味わされてしまっている。

本来ならば、咽せ返る様な環境。なのに体内、ひっそりとしたざわめきは、引かないのだ。泡沫の淫楽電撃がプツプツとそこかしこで弾け、ともすれば泥沼にはまった少女の身体を震わせようとする。綾乃の脳裏に何人もの、同じ症状に冒されて帰還することのなかった先人たちが浮かび出た。

(私も……、ああなる?)

思って、直ぐに打ち消す。絶対にありえない。少女はこれまで、求道者として營々と戦歴を積み重ねてきた。復讐者としての志も、いまでもって失われてはいない。こんなところで淫楽に飲み込まれてしまう訳にはいかないのだ。

(幸い)

伏せていた視線を戻し、少女は海野の股間を見る。やっとファスナーが下りて、柄のトランクスを覗かせている醜悪な股間。変質者の手はベルトにかかっていた。ムッと悪気の漂ってきそうな情景だ。だが少女は目を背けない。唯一先人たちと異なるのは、綾乃にはこの淫楽から逃れる術がある、ということなのだから。

「さあて、そろそろ決心できただろお？ 舐めるのか舐めないのか、ハッキリしろよ」

ズボンを落とした海野が、急かし始める。後ろでは工藤までがズボンを脱いで、トランクス越しに自分でしごいている。ここは獣欲の檻の中なのだろう。退くことは許されない。綾乃は二度三度瞬きしてから海野を見据え、口を開いた。

「勿論、……舐めるわ」

綾乃の語尾は昂奮した海野の鼻息に打ち消された。可憐な唇に突き刺さる視線も、少女の意識を奪おうとしている。そんな劣情を真つ向から受け止めて、横合いから工藤の声。

「まさかオレはダメだなんて言わないよな？ ま、言われたって出ていかねえけど」

変質者コンビが頷きあう。知っていた。どうせ枝葉末節を争うことは無意味なのだ。すべては昔日の異形を倒す為にあるのだから。綾乃が無言でいると、工藤は小躍りしながらポケットに手をつ込む。

「よっしゃ、そうでなくっちゃな綾乃ちゃん！ で、せっかくだからこれも頼むよ」

差し出されたのは、一枚の布切れだった。黒色のそれは鉢巻の様だが随分と分厚い。

「目隠しだよ。綾乃ちゃんだってコイツの汚いモノ、別に見たい訳じゃないだろ？」

「フヒッ！ それは悪くないねえ。画面的にも映えそうだし」

それはすでに決定された事項の様に、二人によって取り扱われる。工藤が早くも綾乃の顔に目隠しをしようとした。

「ちよ、……っ」

「しなくちゃ、舐めさしてはやれないねえ」

抵抗はここでも短い言葉一つで封じられ、作業が続行する。薄汚く笑いながら瞳を覗き込んできた工藤の顔を最後に、眼前、暗闇に覆われる。その向こうから飛び込んでくるのははしゃいだ声。

「おー、似合うじゃん！」

「ほほう？ これはなかなか、秀作だねえ」

黒の長髪をポニーテールにまとめた色白の美少女に、黒い厚手の目隠しは実際、奇妙な鮮やかさを演出していた。しかもそれがうなだれる様にしゃがみ込んでいるとなれば、一層だ。

暗黒を強要された視界、自然と研ぎ澄まされた嗅覚に、悪臭が近寄ってくる。布ズレの音がして、それは一挙に棘を剥き出しにした。露出したペニスから凄まじい獣臭がして、少女の唇から嗚咽が漏れる。

(臭っ、……!!)

喉の奥で、叫ぶ。濃密な牡の臭いが鼻につく。それでも獣臭に向けて、意外なくらい呆気なく、綾乃の顔が傾いでいく。欲獣が愉悅の呻きを上げて、対魔捜査官の唇が、ペニスの先端に触れた。

チユ、……！

ドロドロに先走ったペニスと、涎混じりの唇とが奏でた音。前に進めていくと、挟まれたペニスが唇を捲り上げながら、口腔へ入り込んでくる。その味は強い酸味と粘りに満ちて、忽ち吐き出してしまいたくて、対魔捜査官の精神が辛うじて押し留める。

(頑張れる……?)

体内を駆け巡る激しい熱気を感じても、口腔の汚物から意識を分散する。棘のある電流が身体を蝕んで、チク、チク、肌を内側から刺して回っている。両の手のスカートの裾を握る力が強まった。

「フヒッ！ 案外できるじゃない？」「おら、もっと深く啜えろって」

上方から降ってくる声は混じっていて、二人のとうよりは一匹の欲獣のものに聞こえた。肅々と、従うのだ。感情を捨てる。言葉のままに深く啜え込んでみる。口腔いっぱい。ペニスが侵して、喉全体を駆け上る嘔吐感。強くなる一方の嫌悪を忘れようとするのに、そよいだ陰毛に鼻頭をくすぐられて、屈辱感に脳が戦慄く。

(んっ……！)

キユッと唇を絞って、ペニスを強く挟み込み、頭を前後に振り始める。ヌルリとした感覚、ヌチヌチと五月蠅い粘音、すべては眉間に皺寄せ受け流す様に心がけながら、首を振る。舌を絡ませていくと欲獣の押し殺した声がかましくなり、綾乃の心をいらつかせる。



陰莖に浮かんだ血管の脈動が伝わってきて、脳内、温度が上がる。夥おびただしい汗が額から流れ落ち、施されたばかりの目隠しをびっしりと濡らしている。熱気が、全身を覆っていた。

(も、もう直ぐ?)

ピク、ピク、ペニスが無自然な躍動をし始めた。本能的にそれが暴発の合図だと知って、カーッと血流が促される。嫌悪が増大して、それなのに、身体のことばゆきは消えはしない。耳から首筋、腋、脇腹、敏感なところが悉ことごとく逆立って、ゾクリ、舌先までを粟立たせようとしている。

(早く……っ)

一体化、しつつあるのだ。搔痒感に包まれた綾乃の身体は、暗闇の中、口腔を騁る勃起ペニスにさえ愛撫を感じて舌腹を、唇を、ざわめかせる。体奥、少女の内に黒々としたものが沈殿する感じ。焦りながら、奉仕に力を込める。欲獣の呻き声が高まった。加速する。ペニスが脈動を強めて、膨張して、いきなり頭が二つの掌に鷲掴みにされた。

(! 出る!?)

思うと同時に、口腔に思いつ切り深くペニスを突き刺されて喉を割られる。思いがけない圧迫感に息と思考が詰まって、小さな口の中、濁音がした。

ブ、ピ、……ッ!

始まったのは汚辱の噴出。最初の一条が勢いよく口奥を打ち、二条、三条が狭い口腔を

忽ちドロドロとした汚液で一杯にする。醜い喚き声の上から降ってくる。逆流した臭気が鼻腔を伝う。惨めなありさまなのに、棘のある電撃が背筋を駆け上った。

(く、う……っ！)

少女の息が詰まり続ける。上半身が反る。それは口腔をペニスと汚液に埋められた苦しさと悪臭の為だけではなかった。

余りにも自然に、上気して桃に染まった喉が動き出す。脳の命令を待たずに、コク、と小刻みに音をさせながら、口中いっぱい溜まった精液を嘔下し始めた。漸く小さくなったペニスがヌルリと引き抜かれていく。そのとき生じた唇の隙間から精液が漏れて、唇から口下までをも辱める。

「うへ、最高……！」

やっと嘔下し終えた頃、まだ頭を掴んで放さない凌辱者が感無量な声を上げて、(え?)と綾乃の脳裏、疑問符が浮かんだ。いまの声は? まだ身体中の搔痒感は治まりをみせていない。反射的にスカートを掴み続けていた両手が動き、無遠慮な二つの掌を振り払った。

「あなた、っん、まさか」

まだ喉に貼りつく精液を嘔下しながら、施された目隠しを筆り取る。上方、目が合った。その惚けた薄笑いを浮かべている人物は。

「あ、バレちゃった？」

(そ、そこばかり舐める、なんて……っ)

秘裂全体に熱息をかけながら、執拗に肉芽と包皮を舐られて、ゾクゾク、快楽電流がひっきりないのだ。こんなに敏感だったのか、と思う。もう肉芽自体は痺れて感覚を失っている気さえするのに、その周辺、秘裂も、肉唇も、蟻の門渡りや恥骨さえ、伝播する性感波に浚われて疼き出している。

(立って、いられなくなる……っ)

頭部と腰部の二点で支えられているせいで、綾乃の膝が、砕けたがり始めてしまったのが、誤算だった。殆ど綾乃の股間に潜り込む様にして下から責める工藤の顔面に、へたり込んでしまいそうだった。

脳が、淫音と淫臭に浸っていく。そして精神さえ、チク、と刺す様な閃光に時折寸断されかけて、肉唇に、工藤の指が。

「んあ！ うんん！」

二本指が、肉唇の内側に添えられて、ビクリ、震える。それはただでもほつれた肉唇を広げて、揉む。ネットリと垂れ落ちる淫液で手首までドロドロにしながら、少女の秘裂を指でグシヨグシヨにしていくな。

「くう！ その指い……っ！」

(ダメ、自分のと、全然違う……っ！)

予測できない動きが思わぬところを刺激して、綾乃の下肢を融かそうとする。肉唇を少し無理に摘まれるのは、鋭利な性感。付け根を内側からこそがれるのは、重たい性感。

「んっ、ふっ、色んなところ、……いっぺんにされたらっ……！」

(え？ ……嘘)

ヒップがガクガクとし始めて、急速に昇っていく自分に啞然とする。指にネチネチと秘裂を弄りまくられ、舌に肉芽をつつかれ続け、余りにも性急に、ヒップが浮き上がる感覚。どうすることもできずに細腰が踵ごと浮遊し始める。

「あ、や、……も、もう！」

(イクの!? 嘘、でしょう!?)

三本に増えた指に、ますます広げられた秘裂の下端をくすぐられて、脳が打たれる。グイグイと高みに向かって連行されて、

「……っ！ ん、……！」

ビクンッ！ プピュッ！

ヒップから脊髄へかけて、激しく一度、痙攣を起こして、弾ける様に噴き出したのは絶頂の淫汁。

眼前を埋める白光の中へ吹き飛ばされたのは綾乃の意識。

(あ、……)

自然、脱力して崩れ落ちた綾乃の身体。

(どうして? こんな、あつと言う間に……)

余りにも性急な絶頂に呆然と自分を失って、白漠とした世界に漂いながら、感じるのは秘裂にベトリと貼りつく凹凸。その凹凸はズルリと綾乃のポトムから這い出る感じで離れると、苦笑にも近い表情で口を開いた。

「あー驚いた。あんなんで潮を噴くなんてなあ!？」

へらへらと、少女を挟んで揶揄めいた笑みが交差する。指と口に弄られて、呆気なく達してしまった姿を、見下す様な、呆れる様な視線で見られていた。それでも、イッたばかりで無防備な姿態は、隠し様もなく野晒しなのだ。

「大分、淫乱がサマになつてきたんじゃないのかねえ？」

美少女顔面鬨りに興じていた海野が、ドロドロの美貌をペニスで擦り上げながら揶揄する。その声はもう先程までの本能的な恐怖など失わせたかの様に揶揄めいている。

(……言わせておけば……)

白漠とした意識が、欲獣どもの雑言に刺激されて、苛立ちを伴いながら明瞭さを取り戻し始める。それでもすっかかり力の抜けた自分の肉体の感覚が、それ以上の反駁を控えさせる。それにそもそもこれくらい、計画どおりの筈だった。

(でも)

「んじゃ、そろそろいくか」

工藤の声が聞こえて、ギクリ、胸が打たれる。細腰から両手が去って、膝が震えるのはまだ身体に力が戻ってこないせい。カチャカチャと、ベルトの音が聞こえる。トランクスの衣擦れが続く。顔を颯るペニスの粘音がしつこく続いている。底知れない獣欲が、会室に充満している。あんな性急に昇らされてしまったというのに、純潔まで失って、本当に精神は持ち堪えられるだろうか？

(なにか、手はない?)

この期に及んで生まれた逡巡が、思いがけない言葉を生んで、首を振る。突然の動きに硬い勃起ペニスゴリ、と少女の鼻梁を抉って、耳につくのは海野の鼻息。ネチネチに汚された美貌中からツン、と立ち上る獣臭が甘くて、覚えるのは漠然とした不安。

だが、それさえ一瞬で吹き飛んだ。突き出た綾乃のヒップが上から一つ、ポン、と叩かれたのだ。

(……!)

それは酷く軽い、陰惨な合図。背後がどうしようもなく気になって、海野の勃起ペニスがフイ、と遠退いた。

「見たいんなら、見給えよ」

捻り上げられたポニーテールはそのままに、背後へ視線を差し向ける。黒のバトルスー

ツの背中越しに、真後ろに立つ男が見える。見られていることに気付いた変態が視線を合せて、だらしなく笑った。

「へへ、視線を貰いながら、つてのも悪くねえな」

細腰を欲獣の右手が固定し、左手は用を足すときにも似た感じで股間にあてがっている。その光景が余りにも猥雑で、綾乃は美貌を正面に戻す。と、鼻先に漂うツンと甘い獣臭を浴びて、ふと感ずる絶望感。どうせ、きつと、この臭いを負から正へと変換してしまった様に、この処女肉体は呆気なく、墮落を受け入れるに違いないのだ。

(私……っ)

ジワリと湧いた珠汗が美貌と肢体を熱く覆って、不安が増大し続けている。計画どおりの筈なのに、陰惨な予感が満ちている。ついさっき、瞬く間に絶頂を覚えさせられたのが、精神に鋭い打撃を与えていた。

目を伏せて、海野の勃起ペニスに舌を這わせる。顔面をこんなものに觸れながら貫かれるなら、まだともに奉仕しているほうがマシだった。浅黒い亀頭を舐って、溢れ続ける先走り液をすすって、淫音を立てる。それから唇で包み込んだとき、秘裂にネチリ、灼熱のなにかが当たる感覚。

それがなにか、知っていた。だが、下肢に波打つざわめきにはあからさまな期待感が含まれていて、恐らく綾乃以上に肉体こそが知り抜いている。

(最低)

勃起ペニスを飲み込みながら、心の内、呟く。なによりも、ペニスをおねだりするかの様に左右に蠢く自分のヒップが気に食わなかった。肩を喘がせながら螺旋にうねる上体も嫌悪の対象だった。

しかも、そんな墮落した媚態を、綾乃は列島を守るべきバトルスーツ姿で取ってしまったのだ。

又チ……ッ

「う、んん、……っ!?!」

(あ、き、きた……?)

思考と感情とが寸断される。ヌルリ、秘裂が広げられる。ドッと汗が噴き出て、舌の動きが止まって、ポニーテールを基点に欲獣が少女の首を使い始める。それでも意識は逸れずに秘裂に集中している。広がりが大きくなり、肉唇の押し退けられる感じと、圧迫感。高周波音が大きくなって、思わず右目を瞑ってしまう。

グチュッ

秘裂に焼かれる様な熱い衝撃。綾乃の眼前、世界が複雑に歪んで、肉体が軋む。

(っ、……!)

きつく締まった肉孔の純潔の証を汚濁ペニスが引き裂こうと、灼熱の打撃を与えたのだ。

(くう、……い、た……つ)

それは体奥を引き裂かれる未知なる痛み。激しくて、ドロドロに身体を融かす快楽電流さえ遠退いて、異物に抵抗する処女の肉膜に、感覚の一切が吸収される。無防備になった顎が割られて、より深く口腔スロートに喉元を侵され、それすらも気にならなかった。

「キツいじゃねえか……！」

欲獣が呻いて、チリ、と裂痛が腹部に走る。それは稲妻にも似た鋭さで脳をも打って、打擲ちやうちげくが生み出したのは一瞬の映像。処女を失った対魔捜査官が蒸発する様に能力を失い、異形を前に無力になる姿。

(そんなものじゃ、……ない)

せりあがる強迫観念を強引に追い払うと、再度襲ってきた裂痛に頭の中が染められて、ピキ、ピシ、剥がれる様な裂ける感覚。喉の入り口を割るペニスのせいで吐き気まで催して、混濁した綾乃の肉体が、目尻から涙を溢れさせた。

「んじゃ、一気に」

細腰が両手で掴まれる。後方斜め上、一際大きな鼻息をさせて、圧力が強まる。余りにも確かな予感があつて、綾乃は腿裏に巻きつけた両腕にギュッと力を加え一旦身を固めると、鼻腔から長く緩やかに息を捨てた。その瞬間。

(……っ！)

ビッ、と微かな音がした気がして、もう裂痛はなかった。ヌッと肉孔の奥部が侵され、ありえなかったところにペニスを感じる。ひっそりと、しかし明確な喪失感とともに、今度は下腹に痛痒感が沈殿し始め、少女の肉体がより熱を帯びていく。

「フヒッ！ どうやら」

「入ったぜえ、綾乃ちゃん、対魔捜査官様の中によお！」

欲獣の雄叫び。それは勝鬨かつどきにも似ていて会室に木霊する。余韻に浸る様に、ゆっくり奥までペニスがねじ込まれて、裂痛の残滓に感覚を浚われた肉孔に、ただ禍々まがまがしい脈動だけを感じる。それでも突き刺さったペニスをうねらされると、ネチリ、ネチリ、早くも孔はほぐれ始めた。

「これで、漸く……」

海野の呟きが、聞こえる。同時、ソロリとペニスが後退し始めて、ヒップが、沈殿する痛みと慣れない挿入感に痙攣する。それがいいのか、頻りに工藤が呻いて、ますます強く、細腰が固定された。

「くそお、もう出ちまいそうだ……！」

やたらとゆっくり、挿入と後退が繰り返されて、欲獣が唸る。鍛え上げられた歴戦の対魔捜査官の狭隘な肉孔で、昂奮しきった欲獣のペニスが脈動ごとに膨張していく。それが嫌な予感を誘って、心の内、言葉を捨てる。



(中で、出される……っ?)

動揺を隠そうと、無心を装い口腔スロートのペニスに舌を絡めて奉仕をする。だが背後の欲獣は不意にペニスを引き抜くと、細腰からも手を放し、一步、引いた。

「へへ、いきなり中じやあ汚えからな」

ホッとする間もなく、肉孔の入り口、肉唇と秘裂を甦る感じで亀頭だけを沈めた欲獣が、円を描いて掻き混ぜる。すでに三日間、凌辱の標的にされてきた秘裂はとつくにこなれていて、纏わりつく様にペニスの先端部を包み込み、ジワ、と愉悅の波紋を四周に広げる。波紋は裂痛に傷ついた綾乃の下半身を優しくほぐしながら、少女の脳をもゆつくりと淫靡に染め直して、ヒクリ、ヒップの震えを誘う。そしてその小さな痙攣は忽ち欲獣に引き金を引かせた。

「だ、出すぞ……!」

絡みつく淫音をさせながらペニスが抜け出る。不意、強引に掴まれた左の手首が、熱い粘液まみれの勃起を握らされ、二、三擦り、棹部から亀頭へかけ上る奔流が掌に伝わって、ビュッ! ピュクッ! ビュルッ!

包んだ左手、四指の付け根が汚濁液に強かに打たれる。手首を掴んだまま、グリグリと押しつけ続ける欲獣の力が徐々に緩んだかと思うと、突き放す感じで解放された。

「ふゝ、堪んねえ……!」

「……は、ふ、……」

深い吐息。予感があった。

(きつと、もつと)

激しい汚辱が待ち構えている。

(あ、あれ……、なん、で?)

キン、と鳴り続ける高周波音に包まれた脳で、ふと感じた疑問。何時の間にか、どうして、次の汚辱を待ち焦がれてしまっているのだろうか？ それに答えが出ないうち、綾乃の背中、ブクブクと音がして、小生命体から数多の触手が産み出された。

ズル、グチュヌ……!!

「……わ、……」

増殖。肢体の表層を、走る。埋め尽くす様にして触手が伸びる。

「フヒッ！ フヒッ！」

直ぐ近いところから欲獣の鼻息。肉孔の中、ペニスがビクビクと震える。感覚が、連動しているのだ。そして綾乃の美貌にまで伸びてきた人差し指ほどの触手は……先端部が、細い亀頭のような外観を、していた。

「な、なに？ これ……っ」

ズルリ、亀頭触手が顔面を觸る。頬について、唇について、それから鮮やかな鼻梁に擦

りつけ始めて、震えたかと思うと、少女の目の前、小さな鈴口を眉間に向けて、突如弾けさせた。

「フヒッ！」

ビュク！ ビュビュッ！

「……あ、ぷ、!?」

射精。亀頭触手に顔射されて、一瞬の驚き、それから気付く。身体中を這い回っている数多の触手は。

（ひよっとして、全部……っ）

亀頭触手。

ゾクリ、精神に細波が起こる。拘束されたまま、汚濁した異形紛いの獣液を、いまみたいに。

（……最悪）

最悪過ぎる。なのにゾクゾク、淫蕩な細波はやまない。醜悪で、汚らわしくて、それなのに。

ビュ、ビュルッ！

「あ、ひ、っ!?」

（はじめ、ったあ……っ?）

破裂音が背中から聞こえて、綾乃がゾク、と打ち震える。ジワリと生温かい広がりが右の肩甲骨に染みていく。

龟头触手が次々と、触手に拘束された腕に、腿に、膝裏にまで這いずり回り、先走りの汁でトロトロになりながら、少女の肢体に纏わりつく。ズリズリ、ズリズリ、擦りつく音と感触が、少女の肢体を包み込んで、

ピュクッ！ ドクッ………！

「ひぁ！ あぁ！」

（ちよ、この音……っ！）

欲獣の腹の上、淫らに腐った射精音を聞かされて、背筋が震える。脳に残響音の様にこびりつき、身体が戦慄く。

「フヒッ！ もう動きまくってるみたいだけどねえ？」

「んう、だ、だって、……気持ち、よくって……っ！」

不自由極まりない身体をうねらせ、弾ませ、ヒップを振って、勃起ペニスを出し入れる。クチグチュ淫裂が奏でる淫音と、ピュクプピュ連続する龟头触手の射精音が重なって、少女の心を追い詰める。

（ダメ、止まらない………！ わたし、このままじゃ………！）

ピュクッ！ ピュクッ！ 淫孔が立て続けに痙攣して、淫らな汁を噴きまくって、軽い

絶頂が途絶えない。轟風音が脳内鳴って、却って静かなくらい。龟头射精が続いている。ヒップのうねりはやまない。目の前、目を開いても、明滅が視界を圧してなにも、見えないのだ。

「凄え……綾乃ちゃん、狂っちゃうんじゃねえの……？」

太った欲獣の胸の中に美貌を埋めて、騎乗位でペニスを啜え込んだ対魔捜査官の末路が、眩かれる。

左右に投げ出した両腕と、淫らに踏ん張った両足を、二種類の触手に絡め取られ、背中が見えないくらいに夥しい龟头触手に纏わりつかれた無力な姿。次々と浴びせられる白濁した獣液にネットリとした全身。そしてそれでもなお食欲にヒップを蠢かし、グチュグチュと勃起ペニスを出し入れするありさまが、実際、狂気を思わせるのだ。

ビュクウ！

「っ！ ひああ！ 首にもお！」

ビュビュル！

「や！ そこは髪い……っ！」

スーツの及ばない生身に直接汚濁液を浴びて、ピクリ、身体が大きな痙攣。淫汁が弾け飛んで、脱力の予感。鼻につく獣臭にさえ、身体が熱く震わされる。

ビュッ！ ピュルッ！

「……っ！ ……う、あ……」

容赦なく、首筋に、喉に、背中に、足に、灼熱の射精を浴びるたび快楽が弾けて、心が水面下へ、沈んでいく。グラリ傾いた精神が快楽痙攣に取り込まれ、指の先まで震わせながら、底深い泥濘ぬかるみに埋もれていく。

「え、……う、ぶっ！」

（あ、口の、中まで……！）

だらしなく開いてしまった唇を割って、ズヌリ、亀頭触手に口腔を侵される。舌腹をぬめり進んで、染み出す先走り液で少女の口中を穢しながら、突き当たったのは喉の入り口。

「あ、が、……っ」

（ここ、にもなお……!?!）

ゴリ、と音がして、喉を窺われる。顎が割り開かれて、どうしようもない嘔吐感。ピュッ、と快楽痙攣が淫汁を噴出させて、口腔、触手が大きく脈打った。

ピクッ！ ビュビュクッ！

口よりも奥、顎の付け根、喉の粘膜に直接。獣液を射精されて対魔捜査官の身体が内側から汚濁液に塗られたくられていく。気道が埋められて、粘液を嚙下して、喉の鳴る音が浅ましく響く。ネットリと粘膜を汚しながら胃へ落ちていく粘液が、どうしようもなく惨めで、なのに昂揚を誘われてしまう。

「おお、…………ふっ、ん…………っ」

亀頭触手が、少女の口腔からヌルリ、出ていく。その排泄感にも快樂痙攣が起こって、淫汗が噴き飛ぶ。だらしないままの口端から唾液が垂れ落ち、それさえも気持ちいい。

「うあ、…………なんか、へん、で…………っ」

（あは、なんか、もう、…………！）

ザワ、と逆立った全身、一条の鋼線が縦に走る。そこをゾツとする快樂電流が駆け巡って、ヒップが勝手に、余りにも激しく振れて、キュツと硬直。

「うわ、…………あ…………」

（やだ、くる、…………凄いの、が…………っ！）

辛うじて開いている目の前、二本、三本、亀頭触手が寄ってきて、鈴口を向けられる。

（…………わ…………）

硬く反り上がり始めた綾乃の身体が、期待感に騒然となる。そして噴出孔が、プツ、と広がった。

「…………一斉、なのお…………!?」

ゾクリ、震える。そして、何本もの亀頭触手が対魔捜査官の美貌に向けて、暴発した。

ブリュビュクッ！ ビュピュッ！ ビュククッ！ ブビュッ！！

「ひ、あ、…………つぶ、…………こないっばい、かけられたらあ…………っ!!」



白濁と獣臭に満たされて、不意、綾乃の身体がガクガク、激しく痙攣する。

「イクッ！ イクのお…………!!」

ビュ、ピュシユッ！ ピュク、ビュルッ！

「…………あ、イッてる、イッちやつてるう…………!!」

触手射精の破裂音と、少女の快樂痙攣の噴出音とが重なる。そして浅ましい嬌声も。

「はひっ、ふ、…………うあ…………」

(いやあ、もう、いやあ…………!!)

悲鳴。それが声なく体内に響いて、消えて、残されたのは虚無の感覚。まだらの明暗を
瞼の裏に見ながら、綾乃は欲獣の上に全身を委ねた。ユルユルとまだ快樂を貪ろうとする
ヒップだけを残して。

煌々たる撮影照明の下、少女対魔捜査官が欲獣と触手とに包まれ、無残な姿を晒してい
る。

耐え難い獣臭を放ち、ウネウネと擦りつく亀頭触手にまだドロドロの汚濁液を吐きかけ
られながら、ぐったりと肢体を沈ませた姿は、一個の骸と形容されるべきかも知れなかつ
た。

対魔捜査官が触手の群れの中に沈没するありさまを啞然と眺めていた痩せ身の変態・工

藤が、ふと我に返って、相棒の海野に一つ、訊ねようとする。

「なあ、まさか引き渡す前に死んじまつたり、」

だが工藤は最後まで言葉を言い終えることができなかった。眼下の光景、沈没した少女の下、相棒のありさまに酷い衝撃を受けなければならなかったからだ。

(え…………?)

それは小さな異変だった。勃起ペニスを咥え込んでいた綾乃の淫孔が、突然感じたふとした寂しさ。と同時に、背後で引きつった短い悲鳴と、一步、二歩、後退してからヘタリ、床にしゃがみ込む音がした。

「…………なに…………?」

まどろみとの淵辺にいる、そんな感じの声を出して、綾乃はそして漸く異変に気付いた。淫孔から、つい寸瞬前まで硬かった海野の勃起ペニスが軟体と化し、溶ける様に体内から流れ出ていく。少女の頭を抱く胸が、末期中毒患者の様に震え出した。

「海野お…………」

背後、工藤の情けない声。綾乃の四肢を締める小生命体の力が強化され、それに抗いながら、辛うじて腕を立て、上体を僅かに海野の胸から引き起こす。ドロドロに穢された美貌、薄く目を開いた。

「……っ!？」

そうして見た海野の姿は急速に人間のそれから変わり果てようとしていた。皮膚が液状化したのか、制服の隙間から肉の溶けたものが溢れ出し、顔面は醜さなどではなく、純粹に崩壊しようとしている。頭髮が重力のままマットレスの上へ流れ落ちた。

「まさか、三日の期限というのが僕に對するものだったとは、ねえ……?」

悔恨と憎悪の入り混じった声で、欲獸が呟く。本当に獸に墮しつつあるこの男の口はこの言葉を最後に肉塊に埋め立てられ、代わってくぐもった呻き声を発し始めた。

「異形……っ!」

今度こそ反射的に、綾乃の精神が起ち上がる。気だるく脱力していようとする身体を叱責して、意識をバンデージの右手に集める。酷く重苦しい腕部越しに、右の掌、蒼い光に輝くソウル・ウィップが出現した。それから右の手首に力を集めて地を打ち、作り出した反動で、異形と化した海野の上から半回転、床へと転がり落ちる。仰向けになって、綾乃は攻撃の対象を素早く定めた。

(まず、腕を!)

念じる。射精されまくった手首が、本来のキレには遠く及ばないものの、それでも力強く反応して、スナップを利かしウィップを振るう。蒼い刃は鞭の様にしなりながら、右腕に絡む小生命体を亀頭触手ごと斬り刻んだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



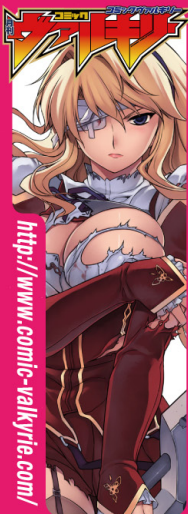
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

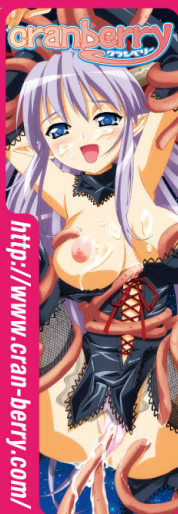
<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ジャンル別で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンライン漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

